

第1章 事業の総括評価

趣 旨
評価結果
総括評価



I 趣旨

国際青年育成交流事業は、日本と諸外国の青年との交流を通じて、青年相互の友好と理解を促進し、青年の国際的視野を広げ、国際協調の精神の醸成と国際協力の実践力を向上させることにより、国際社会で指導性を発揮できる青年を育成することを目的として実施している。

平成30年度（第25回）は、オーストリア共和国、ラオス人民民主共和国及びラトビア共和国の3か国を相互交流の対象国として実施した。また、これらの相互交流国に加えて、チリ共和国、ドミニカ共和国及びベトナム社会主義共和国の3か国からも外国青年を招へいた。

また、日本青年の育成の観点から、内閣府青年国際交流事業の共通の目的は「世界各国の青年との交流を通じて相互の理解と友好を促進し、国際的視野を広げ、国際協調の精神の醸成と次代を担うにふさわしい青年を育成する」ことであり、事業参加によりコミュニケーション力や異文化対応力等の能力向上が図られることをねらいとしている。

以上の目的を達成するため、国家及び地方行政組織への表敬訪問、同世代の青年との合宿型ディスカッショ

ンプログラム、首都に加え複数の地方都市における地元青年との交流等、様々なプログラムを実施しており、特に日本青年の派遣事業については、人的交流の重視を基本としつつ、相手国の多様性を吸収するとともに日本文化の発信が可能な内容に組立てるべく、交流対象国に対して要望を出しながら、毎年見直しを行っている。

今回、本年度事業の成果を測るため、日本参加青年及び外国招へい青年（6か国）全員を対象として事業終了時にアンケート評価を行うとともに、日本参加青年に対しては、事前研修及び帰国後研修時に、能力向上に関する自己評価の変化について比較調査を行った。

事業終了時のアンケート評価の数値基準は、5段階評価（評価の高い方から5～1）を基本とした。また、日本青年の自己評価の変化に関する比較調査については、他の調査との比較の観点から6段階評価（評価の高い方から6～1）を基本とした。

※本報告書では、日本青年派遣事業に焦点を当てて評価する。

※参加青年に対して行った5段階評価のアンケートの詳細については「第3章 資料編」参照。

II 評価結果

1.事業目的の達成度

①日本と交流相手国の相互理解の促進 [1-(7)]

「この事業を通じて、あなたと相手国の人々との相互理解が深まったと思いますか」との問いに対して、日本参加青年は94%が5段階評価の4（深まったと思う）以上を付け、極めて高い評価であった。

②日本と交流相手国の友好の促進 [1-(8)]

「この事業を通じて、あなたと相手国の人々との友好が深まったと思いますか」との問いに対して、日本参加青年は全員が5段階評価の4（深まったと思う）以上を付け、極めて高い評価であった。

③プログラムへの満足度 [2-(1)]

訪問国プログラムの内容についての全体評価は、日

本参加青年は全員が5段階評価の4（良かった）以上を付け、極めて高い評価であった。

特に「地元青年との交流[2-(4)]」は91%の日本参加青年が、「施設訪問[2-(5)]」は日本参加青年の全員が、「ホームステイ[2-(7)]」は97%の日本参加青年が5段階評価の4（良かった）以上を付け、比較的評価が高かった。

④社会貢献活動への意欲 [1-(9)]

「事業参加を通じて、社会貢献活動を始めたい、参加したいという意欲等を持ちましたか」との問いに対して、日本参加青年は89%が5段階評価の4（ある程度意欲を持った）以上を付け、高い評価であった。

また、そのうち55%が5（十分に意欲をもった）であり、意欲の向上に大きな影響を及ぼしたことがうかがえる。

⑤事業参加による参加青年の将来への影響 [1-(10)-1]

「この事業は、あなたの将来に役立つと思いますか」

との問いに対して、日本参加青年は全員が5段階評価の4(役立つと思う)以上を付け、極めて高い評価であった。また、そのうち71%が5(とても役立つと思う)であり、本事業が参加青年の将来形成に大きく役立つことが考察できる。

⑥事業参加による人生などについての考え方の変化

[1-(6)]

「この事業への参加を通じて、人生、社会などについての考え方が変わったと思いますか」との問いに対して、

2.日本参加青年の成長(自己評価の向上度)

本事業の日本参加青年に対し、事前研修時と帰国後研修時での能力の成長の変化について6段階(6=十分備えている、5=備えている、4=ある程度備えている、3=あまり備えていない、2=備えていない、1=全く備えていない)による比較調査を行ったところ、次のような結果になった。

「コミュニケーション能力」については、

3.9から4.9となり、1.0ポイントの増。

「異文化に対応する能力」については、

3.9から5.1となり、1.2ポイントの増。

「チャレンジ精神」については、

4.4から5.1となり、0.7ポイントの増。

「問題解決能力」については、

3.8から4.7となり、0.9ポイントの増。

「企画力」については、

3.4から4.1となり、0.7ポイントの増。

日本参加青年は86%が5段階評価の4(大きく変わった)以上を付け、極めて高い評価であった。本事業が参加した青年の価値観創造に大きな影響を与えていることがうかがえる。

なお、「小さな成長や発展はたくさんあるが、人生観や価値観のベクトルが大きく変わったことはない」との意見もあり、より多くの参加青年に大きな影響を与えられるよう、プログラム作りには引き続き検討の余地があると思われる。

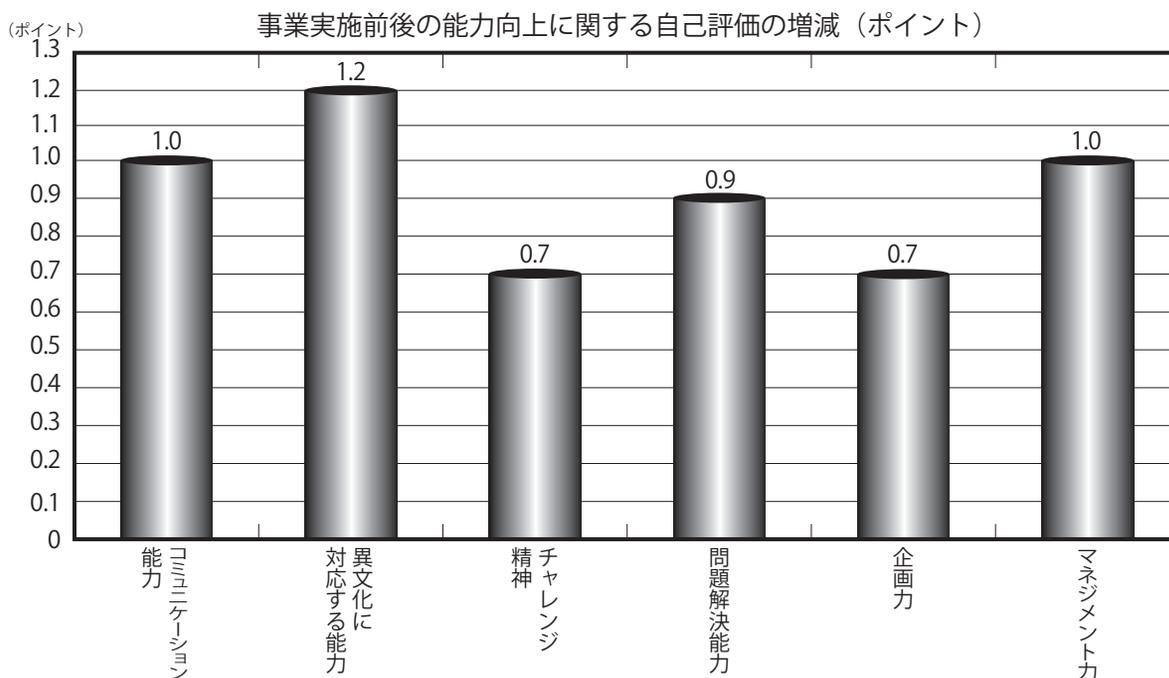
「マネジメント力」については、

3.5から4.5となり、1.0ポイントの増。

(ポイント数については、小数第二位を四捨五入)

伸び幅が最も大きかったのは、「異文化に対応する能力」であった。その理由として、いずれの訪問国においてもホームステイや合宿型ディスカッションが用意されており、現地青年等との交流により、異文化を直接体験し、向き合う機会が多かったことによるものと考察できる。

また、帰国後に行われた国際青年交流会議では、6か国の招へい青年たちと持続可能な開発目標(SDGs)の総括テーマに連なる、「キャリア形成」、「メディアリテラシー」、「多文化共生」の3テーマについてディスカッションを行い、様々な文化を持つ外国青年の考え方を学ぶことができたのも大きな要因と考察できる。



次に伸び幅が大きかったのは、「コミュニケーション能力」と「マネジメント力」であった。

「コミュニケーション能力」は、先に述べた現地青年との交流の機会の多さに加えて、日本参加青年同士の密な連絡体制から向上したものと考察できる。

また、「マネジメント力」についても、本事業の特徴の一つである、派遣団を形成して事前研修からチームビルディングを行う過程において能力が向上したと考察できる。

その他の能力においても、比較的高い伸び幅があった。「問題解決能力」の向上は、派遣団における意見の相違や、訪問国活動中の突発的な環境の変化が生じた場合に、どのように対処すべきかを経験として身につけ

ることができたことが大きな要因と考察できる。

「チャレンジ精神」は、訪問国における英語によるディスカッションで自分の意見をしっかりと発言する経験が能力向上に良い影響を与えたものと考察できる。

また、「企画力」は、自主研修期間中の積極的な事前学習や、訪問国でのプレゼンテーション等の準備をする過程で大きく身についたものと考察できる。なお、「訪問国活動中、交流国に常に任せるのではなく、日本青年にプレゼンテーションやディスカッションの内容を任せてもらう時間があってもよいと思った」との意見もあり、訪問国活動中にいかに日本青年の企画力を伸ばすかについては、今後の課題として検討する余地がある。

Ⅲ 総括評価

最後に、アンケートの総合評価を含めて、今回の総括評価をまとめる。

「事業全体をどのように総合評価しますか[1-(2)]」との問いに対して、日本参加青年は97%が5段階評価の4(良かった)以上を付け、極めて高い評価であった。

また、そのうち70%が5(大変良かった)であり、本事業を経験した多くの青年が事業内容を高く評価していることが分かる。

日本参加青年からは「『国際的な視点を身につけた人材になる』という目標を達成できただけでなく、『外国青年と友達になる』『英語運用能力を伸ばす』という予期せぬ成果が挙げられた」など、自身の成長からの評価や、「今まで持っていた固定概念をなくすことがで

き、大学や個人レベルではできない体験ができた」「個人旅行では得ることのできない経験をすることができた。かけがえのない宝になった」など、プログラム内容を評価するコメントが多く寄せられ、そのような諸点を勘案してみると概ね、派遣された国の青年との交流や産業、文化、教育施設訪問等各種の活動を通じて、両国青年相互の理解と友好の促進を図るとともに、参加青年の成長に良い影響があったものと結論づけられる。

以上、参加青年からの評価結果から導き出せることは、本事業の目的である「日本と交流国の相互理解と友好の促進」に関して、交流国及び国際社会への理解の深まりを自覚し、かつ、青年自身の事業参加による効果の認識を示すなど、十二分な成果を収めたものと評価できよう。